

宝永山ハイキング

ほとんどの好きで富山は、ここから女台まった

平成18年8月19日(小学三年)天晴

スバルラインに入るつもりが富山山スカイラインに入ってしまった。途中休けいをした所の案内板は、水塚馬場あたりは、木林林ばかりで二、三ムクの車が休んでいただけで、少しさみしい。風がすわしい。今さらもどいてもしかたがない新五合目を目指すことになった。

これがほんと富山山の運命的な出会いになる。耳がジーンとなる。ポテトチップスのふくらみがパンになる。まわりの森林は広葉樹の雑木林から針葉樹に替わった。高い樹から一方にひたひたおいた低い樹に変わる。おもしろい。

新五合目に着くとさつま芋のにおいがた。富山のハイキングの人がいてほっとした。「宝永山ハイキングの看板にぎえられるように山に入った。」宝永山登るの？昔は、入山林止まった。たけい。

と祖母が「ん」とも言っている。山頂登山者に混って、大合目まで登り、そこから宝永山道に入った。ゴツゴツした山石道を下がりたり上がりたりして行くと、そこにガッツと巨大な赤い口を開けた第一火口が現れた。

火口底まで降りる。大きな赤石の前に立つて、火口の穴に向かって「ワッホ」と叫んでみた。「ワッホ」と低い音がかえってきた。ワッホと大きな声を出す事は、体にたまったCO₂をはき出し、心身のリラックスをさせる。山の休息には、一番いいらしい。

火口底を登り、一時間半の道のりを宝永山頂上に向かって登った。今度度は、砂地なので山頂までの道がジクザクに見えているのになかなか進まない。やっとたどりついた山頂は、風が強い。雨がほとんど流れない。お茶がうまい。帰りは下がるわりてくる、つめたいきり、雲を全身にあびる。原則に行く人の姿が見えない。わー、こわーとと田べつとすうーとすうーとすうーとすうーと。その後は昔の火口と下の方が地味を上げたように町や畑が見える。ほんとうに雨雲の上に立つている。うーん。

六合目にもどって「宝永山荘」という山小屋で昼食の時間を過ごした。これがまた、うまい。山小屋もおもしろい。くると目見て回った。いろいろのグッズやおみやげ品をいはい売っていた。この時から、ぼくは「この次は絶対富山山頂だ」と決めた。